

発信人は死者

長編推理小説

西村京太郎



KOBUNSHA BUNKO

光文社文庫



光文社文庫

長編推理小説

発信人は死者

著者 にしむらきょうたろう 西村京太郎

1986年3月20日 初版1刷発行

2004年6月10日 52刷発行

発行者	篠原睦子
印刷	凸版印刷
製本	榎本製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Kyōtarō Nishimura 1986

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-70314-3 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

光文社文庫

長編推理小説

発信人は死者

西村京太郎



光 文 社

目次

三十二年目の夏	5
伊五〇九潜の謎 なぞ	38
トラック諸島	74
金塊	112
南原機関	136
匿名の手紙	156
潮岬 しおのみさき	179

パンフレット	217
脅迫状	241
圧力	273
ある告白	306
苦闘	347
サメ狩り	370
海中の戦い	390
解説 中島河太郎	427

第一章 三十二年目の夏

1

五日前から、毎夜午前二時になると、その電波は、いかにも弱々しく、遠慮がちに、野口浩^{こう}介^{すけ}の受信機に飛び込んでくるようになった。

野口は、東京の郊外、調布市仙川^{せんがわ}町に住んでいる。

甲州街道から百メートルほど入った新興住宅地だが、野口の家はすぐわかる。

大邸宅だからとか、奇抜なデザインの家だからというのではなく、小さい庭に、高さ二十八メートルのアンテナが立っているからである。

野口の本職は、カメラマン。報道カメラマンとしては、中堅クラスといたらいいだろう。フリーの立場で、週刊誌などと契約して仕事をしていた。

野口のいくつかの趣味の一つが、ハム（アマチュア無線家）である。ハムというのは、テレビやラジオなど電気機器のブーンという雑音のことだが、アマチュア無線家は、やたらに電波

を発信してうるさいものだとということから、それが、アマチュア無線家の俗称になったのだらうか。

現在、日本のハムのは数はアメリカを抜いて世界のトップで、約六十万、そのうち、自分の無線局を持つ者三十四万といわれている。

野口が、免許を取って、その仲間入りしたのは、一年前で、六畳間を改造した、コールサインを持つ無線局も作った。

ハムには、二種類ある。

一つは、電話級アマチュア無線である。これが、現在のハムの大部分を占めている。

試験は比較的簡単で、短波(HF)を使って、肉声で、国内のハム同士から、海外のハムとも交信ができるし、超短波(VHF)を使えば、自動車や家用機からも通信できる。

もう一つは、電信級アマチュア無線である。このほうは、モールス信号コードによる通信で、電信の実技の試験を受けねばならないし、相手の肉声が聞けないので、ハムの間では人気がない。

野口は、この両方の免許を持っていた。

野口が、電信のほうにも興味を持ったのは、こちらのほうが、混信に強く、海外との通信が楽だからである。

問題の電波は、無線電信のほうで、五日前の午前二時に、いきなり、万国共通の救難信号 S・O・S が飛び込んできたのだ。

普通、救難信号のような、緊急通信を初める場合、まず、O・S・O (緊急通信開始) の合

図を送ってくる。

だが、この相手は、いきなり、S・O・Sのモールス・コードを送ってきた。

野口は、あわてて、送信キーに手を置いた。

相手が日本人か外国人かわからなかったが、とにかく、和文で、

——ソチラノ名前ト場所ヲ知ラセヨ

と、繰り返し返した。

だが、相手は、野口の質問には答えず、一方的に、信号を送ってくるだけだった。

翌日も、午前二時に、S・O・Sが飛び込んできたので、今度は、欧文で、

——WHO ARE YOU?

と、打ってみたが、結果は同じだった。

どうやら、相手は、受信機を持たず、送信機だけしか持っていないらしい。

通信は、いつも同じだった。

・
・
・

・
・
・

・
・
・

・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

・ | | | |

| | | | |

・ | | | |

このモールス・コードが繰り返されたあと、ぱたりと止^やんでしまうのだ。

まるで、その信号音は、地の果てから送られてくるように弱々しかった。

そのことが、かえって、報道カメラマンとしての野口の気持ち^を、強く引きつけたといっ
てよいかも知れない。

アンテナの方向をいろいろと変えてみて、どうやら電波は、南から送られて来ているらしい
ことがわかった。だが、南のどの辺りかがわからなかった。

野口は、モールス・コードの一つ一つに、国際符号を当てはめてみた。

最初の三つは、アルファベットであり、続く六つは、数字である。

・ ・ ・

| | |

・ ・ ・

・ ・ | | |

2 S O S

江上のほうは、三カ月前に三十七歳になったのに、こちらのほうは、夢ばかり追いかけているといってもいい男だった。彼の夢は、いつか、大きな外洋ヨットのオーナーになって、氣まに、時間を忘れて、世界を一周することだった。形のいいヨットを見ると、一日中見とれていたり、時には、見知らぬヨットのクルーになって、ふらりと航海に出てしまったりもする。大恋愛の末に結ばれた奥さんに逃げられて、やもめ暮らしをしているのも、そのせいである。二十七歳の野口が、この二人と知り合ったのは、ハム仲間だからではない。三人は、スキューバ・ダイビングの仲間だった。

ボンベをつけて、二十メートル、三十メートルの海にもぐる。沈黙の青い世界。そこが三人の共通の世界だというのは、彼らが、どこか一風変わっているせいかも知れなかった。

六月三十日に、野口の家近くのプール開きがあり、二人が泳ぎにやって来たときも、自然に、奇妙な救難信号のことが、話題になった。

梅雨^{つゆ}の晴れ間の、かあつと照りつける日で、由紀子は、パラソルの中で、身体^{からだ}にオリーブ油を塗りながら、

「その妙な信号のこと、誰かに話したの？」

と、野口にきいた。

野口は、腹這^{はらば}いになって、濡れた頭を、両手で、ごしごしこすっている。

「三日前に、海上保安庁に電話で話してみたよ。日本の漁船が遭難していたら大変だからね。もちろん、外国の船の遭難だって同じだけど」

「それで、何だって？」

由紀子は、手を休めずにきく。色白で大柄な身体に、オレンジ色のビキニがよく似合っている。

野口は眩^{まよ}しそうに、ちらりと彼女を見てから、

「現在のところ遭難した漁船はないし、外国船の遭難もないそうだ。それに、今は、どんな小さな漁船でも、優秀な無線電話を積んでいて、遭難の場合、モールス・コードではなく、無線電話で、位置や状況を知らせてくるんだ。外洋ヨットだって同じだろう？」

野口が、江上に声をかけると、江上は、仰向けに寝転がり、悠然と空を見上げたまま、

「ああ、近ごろは、無線機の性能が良くなったから、相当遠くにいるヨットとも会話できるよ。ただ、無線機を積まずに、外洋に出て行く無謀な連中もいるがね」

「じゃあ、トン・ツー・トン・ツーっていうモールス信号を送ってくる船なんて、今は全然ないってこと？」

由紀子は、相変わらず、白い太もものあたりに、丹念にサン・オイルを塗りながら野口にきいた。どこか物うげな喋^{しゃべ}り方は、彼女の癖^{くせ}だった。それを、生意気だという人もいるし、魅力的だという人もいる。

「そうともいい切れないんだ」と、野口はいった。

「おれが調べたところでは、ちょっとした船は、万一に備えて、遭難自動通報用送信機というのを積んでいるんだ。船が沈没し、この機械が海に浮かぶと、自動的にアンテナが飛び出し、

モールス・コードでS・O・Sを発信するらしい。しかし、おれが受信したような妙な数字は、発信しないようだ」

「ふーん」

と、由紀子は、鼻を鳴らした。

陽^ひが落ちて、三人は、野口の家に戻った。

由紀子は、持参した矢がすりの浴衣に着替え、中華料理の八宝菜を作ってくれた。

「その浴衣、なかなか色気があっていいねえ」

野口と江上が、期せずして、同じ言葉を口にした。別に、料理を作ってくれたからお世辞をいったわけではなかった。矢がすりが似合う女の子なのだ。

由紀子は、クスッと笑ってから、

「二人にキスしてあげたいけど、喧嘩になるといけないから止める」

「おれは、ユキベエのキスぐらいじゃ喧嘩しないぜ」

と、江上。

「おれは自信ねえな」と、野口がいった。

「ユキベエが、あんたに先にキスしたら、ぶん殴るかも知れねえや」

「それは、ユキベエに惚^ほれてるんだ」

「よせよ」

と、野口は笑った。冗談にいったのだが、正直に言って、彼自身にも、自分の気持ちがよく

わからないのだ。ひょっとすると、おれは、ユキベエに惚れているのだろうか。

午前二時になると、三人は無線室^{シヤック}に入った。

野口は、腕時計に眼をやり、

「そろそろ、聞こえてくるぞ」

と、いった。

いつものように、弱々しいモールス・コードが聞こえて来た。

S・O・S

そして、意味不明の数字が並ぶ。

S O S 2 4 5 1 0 9

数分間、同じ信号が繰り返されたあと、ぱったりと切れてしまうのも、いつもと同じだった。

「電池が無くなっていくのか、だんだん弱くなっていくんだ」と、野口は二人にいった。

「君たちは笑うかも知れないが、毎夜、この奇妙なモールス・コードを聞いていると、なんだか、遠い南の海の果てから、誰かがおれに向かって、助けてくれと呼びかけているような気がするんだ」

「あたしは笑わないな」

由紀子が、真顔でいった。

「そういうの、あたし好きなもの」

「南海の果てからか」

江上は、うーんと唸^{うな}ってから、

「しかし、相手の正体がわからないんじゃないなあ」

「それで、おれは、明日から二、三日、この不思議な電信の謎^めを調べてみようと思っているんだ」

「他のハムも、受信してるんじゃないの？」

と、由紀子がきいた。

「その可能性は、あまりないと思ってる」

「なぜ、ハムって、何万人でいるんでしょう？」

「ああ。おれみたいに、無線局を開設しているのだけでも、三十四万人だが、その中の約九〇パーセントが、無線電話なんだ。電信のほうは、モールス・コードを覚えなければならぬし、相手の肉声が聞こえないから面白くない。それで、免許を取る人間が少ないんだ。それに、電信の免許を持っていて、あの救難信号を受信した者がいたとしても、わけのわからない数字が並んでいるんで、誰かの悪戯^{いたづら}だと思ったはずだよ」

「野口クンは、悪戯だとは思わないわけ？」

と、由紀子がきいた。由紀子は、中年の江上だって、クンづけで呼ぶ。

「ああ、思わないね」

と、野口はいった。

翌日は、いかにも梅雨時らしい、朝から小雨の降る天候だった。

野口は、昨日泊まった江上と由紀子を、それぞれの仕事場に車で送ってから、千代田区霞が関の海上保安庁にまわった。

広報室に行き、救難信号のことを話すと、中年の職員は、

「この間、電話してきた人かね？」

「そうです。あの時、現在遭難している船はないというお話でしたが、その後も、依然として同じ救難信号が聞こえてくるものですから」

「実は、うちの通信室でも、同じ救難信号をキャッチしていたそうだよ」

「そうですか」

野口は、ほっとしたような、同時に、がっかりしたような、妙な気分で、小柄な職員の顔を見た。

考えてみれば、当然の話なのだ。海上保安庁の強力な通信室が、アマチュアの野口が受信できたあの救難信号を、キャッチしていないはずがないのだ。

「それで、発信者は、わかったんですか？」

「それなんだがね」